様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：１２６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５４６３６１７

研究課題名（和文）地域の実情に合わせた世代間交流プログラムの開発と有効性の検証

研究課題名（英文）Development and validation of intergenerational exchange program in accordance with the actual situation of the region

研究代表者
森田　久美子（Morita, Kumiko）

東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・准教授

研究者番号：４０３３４４４５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,800,000円

研究成果の概要（和文）：全国の学童保育における高齢者との世代間交流の実態調査をし、1,714か所を分析対象とした。交流を「継続的に実施」している所は36.4%であった。交流経験の有無と交流に期待することでは「高齢者の経験や知識を学ぶ」「高齢者を敬う心を育てる」など多くの項目で、交流経験あり群のほうが交流への期待割合が有意に高かった。質的分析の結果、「世代間交流の実践における課題」は、66概念が生成され、そこから12カテゴリーが構築された。さらに、今回開発したプログラムにおいて、地域の話を題材にした回想法や昔遊び（影絵）の共同作成等が地域での高齢者の役割意識や生きがいにつながったと考える。

研究成果の概要（英文）：The research analyzes data collected from 1,714 after-school care of school children, 36.4% of which regularly implement the program. The common expectations are as follows: "learning an experience and knowledge from elderly" and "nurturing respect for elderly." The facilities with the past experience in the program tend to have higher expectations for the program. The result of qualitative analysis indicates 66 concepts and 12 categories in the challenges to the implementation of the intergenerational program.
In addition, in the newly developed program, "reminiscence" and "co-creation of shadow play" matchd to the region were led to the role awareness and purpose in life of the elderly in the community.

研究分野：地域保健看護学

キーワード：世代間交流　高齢者　学童保育　構成的エンカウンター　回想法　地域　プログラム　介入

１．研究開始当初の背景

現在、我が国では世帯構造が大きく変わってきている。厚生労働省の「国民生活基礎調査」によると、三世代世帯の割合が平成元年には14.2%であったのが平成23年には7.4%まで減少した。一方で高齢者世帯の割合が平成元年には7.8%であったのに対し、平成23年には20.5%にまで増加している。この数字より、高齢者と若い世代の交流が、以前に比べて非常に少なくなっていることが推測できる。このような状況下で、近年、保健福祉サービスの領域では、世代間交流を推進する試みが行われている。シルバー大学などが各地で開催されており、定年後、地域で元気に暮らしている高齢者がもっと活躍できる場があっても良いと思われるが、元気高齢者が世代間交流を行うことによる効果を報告している研究は少ない。また、全国学童保育連絡協議会の調査（2012）によると、共働き・一人親家庭等の小学生が毎日利用する学童保育は増え続けて、利用する入所児童数も増え続けている。放課後や学校休業日に「安全・安心な生活」を求める声は高まっており、学童保育の場を利用して高齢者と子どもが交流を行う取組みなどが埼玉県などの一部自治体で始まっているが、学童保育側、高齢者双方にどのようなニーズがあるのか、交流の効果などについて、十分に検証されていない。

２．研究の目的

(１)放課後の子育て支援として社会から需要の多い学童保育における世代間交流の実態を明らかにし、全国の現状を分析する。

(２)世代間交流の経験の有無による相違を明らかにする。

(３)世代間交流を継続的に実践するための課題を明らかにする。

(４)上記研究結果を踏まえて、地域の実情に見合った世代間交流プログラムを開発し、子どもおよび高齢者の幸福感や生きがいへの効果を検証する。

３．研究の方法

(１)研究１　全国実態調査

①研究対象

平成26年2月現在で役場機能が避難している福島県の7町村を除いた全国の1,910市区町村の学童保育担当課を通じて、調査票が配布された学童保育を調査対象とした。721市区町村、1,902か所から回答があり、このうち学童保育の種類が「放課後児童クラブ」であった1,714か所を分析対象とした。

②用語の操作的定義

学童保育：本研究では放課後児童クラブ、放課後子ども教室、放課後児童クラブと放課後子ども教室の一体型・連携型をすべて含めて調査を依頼したが、放課後児童クラブからの回答が90.1%と大多数を占めたため、今回は、放課後児童クラブを「学童保育」と定義する。

③調査方法

前述の市区町村1,910か所の学童保育担当課に5部ずつ調査票を郵送した。当該地域に学童保育が5か所以下の場合には全か所に、6か所以上ある場合には無作為に5か所を抽出して学童保育担当課より調査票を配布してもらった。調査票の記入は、指導員(常勤もしくは学童保育の活動内容について十分に把握している者)が行うように依頼した。調査票に記入後、返信用封筒にて研究者に直接返送することとした。

④調査内容

学童保育の概要(設置主体、職員数、学童数、開設場所、開設時間、交流の有無等)、世代間交流の実施状況、世代間交流のプログラム内容、世代間交流に期待すること等について調査した。

⑤調査期間

2014年7月～12月

⑥分析方法

世代間交流の経験有無と施設の概要（運営主体、開設場所など）との関連を見るためにロジスティック回帰分析を行った。世代間交流の経験有無と現在実施または今後実施したい交流プログラムの内容および交流への期待との関連を見るためにχ^2検定を行った。分析には統計ソフト SPSS ver.22 を用いた。また、自由記述の部分に関しては、Modified Grounded Theory Approach(M-GTA)により質的に分析した。

⑦倫理的配慮

調査の目的、方法、研究協力の任意性と撤回の自由および個人情報の保護について文書で説明し、調査票の返送を持って研究協力への同意を得たものと判断した。本研究は、東京医科歯科大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号1807)。

(２)研究２　世代間交流プログラムの開発と介入

①研究対象

研究１で得られた回答の中から、高齢者と学童の世代間交流プログラムを継続的に実施しており、二次調査への協力が得られた学童保育４か所を選択した。介入群（２か所）は小学１～６年生46名、高齢者20名（平均年齢74.7±4.2歳)、対照群（２箇所）は小学１～6年生109名、高齢者15名（平均年齢70.6±4.3歳）であった。

②調査方法

介入群は、全国調査の世代間交流への希望・期待を参考に地域特性に合わせた回想法や昔の遊び、構成的グループエンカウン

ターを取り入れた世代間交流プログラムを実施、対照群は通常の世代間交流(読み聞かせ・昔遊び等)を実施し、前後に質問紙調査を実施した。

③調査内容
基本属性（性別、年齢）、高齢者もしくは子どもとの日常での接触頻度、主観的親密感(IOS 尺度を参考)、日本語版 The Warwick-Edinburgh Mental Well-being Scale (WEMWBS)（Suganuma2014）、高齢者は上記に加えて日本語版 generativity 尺度（大場他 2013）を用いた。

④調査期間
2016 年２月～３月

⑤分析方法
各項目について、群内差は Wilcoxon の符号付順位検定、群間差は Mann-Whitney の U 検定を実施した。分析には統計ソフト SPSS ver.22 を用いた。

⑥倫理的配慮
調査の目的、方法、研究協力の任意性と撤回の自由および個人情報の保護について文書で説明し、調査票の記入を持って研究協力への同意を得たものと判断した。本研究は、東京医科歯科大学医学部倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号 2289)。

４．研究成果
(1)研究１　量的分析による結果
①学童保育施設の概要
世代間交流の実施状況は「実施していない」762（45.9%）、「過去に実施したことがある」293（17.7%）、「継続的に実施している（年1回以上）」604（36.4%）であった。運営主体は、「公立」が 872（51.9%）と最も多く、「法人」281（16.7%）、「社会福祉協議会」184（10.7%）の順に多かった。開設場所は、「学校敷地内学童保育専用施設」469（27.9%）が最も多く、児童館 297（17.7%）、「余裕教室」262（15.6%）等が多かった。正規職員数は、平均 2.0 人で、資格としては「保育士」が 652（70.3）と最も多かった。児童数の平均は 49.3 人、障害児数の平均は 1.6 人であった。学童保育の終了時間が 18 時以降は平日 969（57.1%）、土曜日 653（44.0%）、長期休暇 1,026（61.6%）であった。

②世代間交流を実施していない理由
世代間交流を「実施していない」と回答した 762 か所のうち、理由の記載があった 335 件について内容を分類した。未実施の理由として 6 つのカテゴリーに分類され、最も多かったのは【機会・関心】がないが 110（32.8%）、続いて【環境要因】が 95（28.4%）、【学童保育以外の交流】が 68（20.3%）であった。
さらに、「過去に実施したことがある」と回答した 293 か所のうち、意見・要望（自由記載）に交流を継続できなかった理由が明記されていたのが 11 か所で、その内容を分類した。【指導者の人材不足】【交流可能な高齢者不足】【活動内容・方法】【感染症】【予算】の 5 つのカテゴリーに分類された。

③世代間交流の実施状況
世代間交流を「継続的に実施している」と回答した 604 か所の交流実施状況を表５に示す。交流に参加した高齢者の過去１年間の実人数平均は 27.4 人、交流回数は「年に 1～5 回」が 66.2%で最も多かった。参加高齢者の所属は「老人クラブ」が 182（31.9%）であった。なお、「その他」の割合が高いが、内訳は地域住民や民生委員など個人での参加や、デイサービス、介護老人保健施設の高齢者などであった。交流内容の企画実施は、「学童関係者」230（39.9%）、学童関係者と高齢者との「共同」225（39.0%）、「高齢者」73（12.7%）であった。世代間交流のきっかけは「学童から」326（56.5%）、「高齢者から」221（38.4%）であった。コーディネーターがいる割合は 369（64.2%）、内訳は「学童関係者」が 231（62.8%）、「高齢者」95（25.8%）、「自治体職員」89（24.2%）であった。世代間交流に対してどのように感じているかを「高齢者」「子ども」「職員・スタッフ」それぞれについて、肯定的・否定的・どちらともいえない、の 3 段階で回答者に判断してもらったところ、肯定的と判断した割合は「高齢者」538（93.1%）、「子ども」493（85.4%）、「職員・スタッフ」528（92.0%）であった。

④世代間交流の実施経験有無別による比較
世代間交流を「継続的に実施している」および「過去に実施したことがある」施設を「交流経験あり」群、「実施したことがない」施設を「交流経験なし」群として分析をした。世代間交流経験の有無に、施設概要が影響するかを見るために二項ロジスティック回帰分析を実施した(表１)。
交流経験の有無に影響する変数として、「正規職員の有無」「高学年の受入れ有無」「開設場所が児童館」が選択された（モデル χ２検定で $p<0.001$）。正規職員のオッズ比は 1.389（95%信頼区間 1.061～1.818）、高学年受入れのオッズ比は 1.335（95%信頼区間 1.032～1.727）、開設場所が児童館の場合のオッズ比は 2.445（95%信頼区間 1.314～4.548）であった。
世代間交流の実施状況で、「継続的に実施している」施設においては現在実施しているおよび今後実施したいと思っているプログラム内容について、「過去に実施したことがある」および「実施したことがない」施設においては、今後実施したいと思うプログラム内容について回答をもとめ（複数回答）、交流経験の有無別に比較した。交流経験あり群およびなし群どちらも「昔遊び」の割合が最

も高かった。また、「囲碁・将棋」では交流経験なし群において、「昔遊び」に次いで今後希望する割合が高く、交流経験あり群とほぼ同じ割合となっていた。「季節行事」や「読み聞かせ」においては、交流経験あり群となし群の差が大きかった。交流経験あり群では、その他の内容としてグランドゴルフやマジック、ゲーム大会などをあげていた。

交流経験あり群およびなし群どちらも「高齢者の経験や知識を子ども達が学ぶ」の割合が最も高かった。「子どもが礼儀について学ぶ」「子どもの見守り・安全確保」「その他」は 2 群で違いが見られなかったが、それ以外のすべての項目において、交流経験あり群のほうが交流経験なし群と比較して、交流への期待割合が有意に高かった。

表１　世代間交流経験の有無と施設概要との関係

		B	標準誤差	有意確率	Exp(B)	Exp(B)の 95% 信頼区間 下限	上限
運営主体							
公立		-0.382	0.362	0.185	0.676	0.374	1.222
社会福祉協議会		0.282	0.342	0.383	1.340	0.685	2.618
地域運営委員会		0.145	0.363	0.683	1.160	0.569	2.362
保護者会		0.046	0.348	0.983	1.006	0.510	1.981
法人等		0.160	0.381	0.755	1.196	0.569	2.076
正規職員	有無	0.329	0.127	0.017	1.389	1.061	1.818
障害児	有無	0.218	0.183	0.089	1.244	0.868	1.890
高学年	有無	0.289	0.131	0.028	1.335	1.032	1.727
開設場所							
学校敷地内学童専有施設		-0.163	0.297	0.730	0.902	0.504	1.616
余裕教室		0.077	0.289	0.803	1.080	0.613	1.977
学校敷地外の学童専有施設		0.240	0.382	0.459	1.271	0.677	2.388
児童館		0.894	0.317	0.005	2.445	1.314	4.548
公民館等		0.498	0.324	0.148	1.646	0.845	3.131
借用民家		0.736	0.445	0.229	1.769	0.714	4.383
社会福祉協議会		-0.460	0.370	0.214	0.631	0.305	1.304
定数		-0.353	0.389	0.376	0.703		

二項ロジスティック回帰分析
変数の逐次投入法による変数選択法
モデルχ2検定 p<0.001, Hosmer-Lemeshow検定 p=0.956

(2)研究１　質的分析による結果

世代間交流の継続的実践に関わる要因分析の結果、66 概念が生成され、そこから 12 カテゴリーが構築された。以下、カテゴリーを【　】、概念を＜＞、生データを『　』で示す。

①学童保育側の課題

核家族、親の多忙の中で、＜世代間交流の意義＞といった肯定的な意見もあるが、多くの学童保育からあげられていたのは、『子どもの数も増え、私たち自身も余裕がない』『習い事その他で忙しい子どもたちが多く、どのように交流できるか難しい』等、＜学童人数の多さ＞＜時間不足＞であった。また、『学童の職員の数が少なく勤務時間も限られているため、交流事業を企画、発展させることができない』といった＜職員の人数不足、日常業務の多忙＞、『小規模の学童のため、行事企画を専門に行える指導員がいない』といった＜企画、運営能力＞等、学童における指導員の問題が、世代間交流の実施の難しさにつながっていた。

②子ども側の課題

『平日の学童クラブは子どもの人数が多く、子ども間のトラブルもあり、高齢者に急に入っていただいて、良い時間を共有することは難しい』『気になる子もたくさんおり、多動、集中力のなさ、失言など高齢者の方が気分を悪くするのではないかと思うと難しくてできない。また、気になる子に対してどのように理解していただけるのかも不安』など、＜失礼な言動＞＜発達障害＞等が子ども側の課題としてあげられていた。また、『認知症の方とはコミュニケーションはとりづらく、子ども達に理解させることは難しい』等、＜障害のある高齢者に対する接し方＞の難しさも意見としてあげられていた。

③高齢者側の課題

＜子どもに対する接し方＞について、『教え方に慣れていない面がみられる。子どもとの接し方や上手な教え方の基本をきちんと研修して身に着けていただいてから取り組んでいただくのが良いと思う』『若夫婦と親世代ではやり方も考え方も違い、～すべきだという風におしつけられると、それも困る』などの意見があった。高齢者は、教示的で厳しい場合もあり、子どもの気持ちをくみ取ったり、反抗期の子どもへの接し方の困難さがある場合もある。また、＜学童への理解、意識不足＞により、高齢者中心の活動になる場合がある。さらに、＜高齢者自身の多忙＞のため、協力が得られにくいという課題があった。

一方、『有償ボランティアとして高齢者の方が働いている』『スタッフ（ボランティアさん）の方が 60 代以上。今のところ地域の方が入ってくださっているので地域の中での世代間交流になっていると思う』等、＜元気な高齢者＞がボランティアとして関わり、日常的な交流につながっている場合もあった。

④高齢者と子ども、保護者との関係性の課題

世代間交流において、子どもと高齢者の＜活動の差＞＜世代間ギャップ＞、また高齢者と保護者の間において、『高齢者から叱られて子どもが泣いていた』等

＜高齢者と保護者の意見の相違、クレーム、トラブル＞があった。一方、【高齢者と子ども、保護者との肯定的な関係性の要因】として、『学童保育の横を通り過ぎる時声をかけてくれる』等、＜地域に根差した付き合い＞を深め、＜地域の子育て力のアップ＞＜ネッ

トワークの充実＞につながっていた。

⑤プログラムに関する課題
学童保育の時間の短さや人員等、また低学年、高学年が一緒に活動するため、＜発達の差によるプログラム構成困難＞や、企画、運営に専念する人員の不足、能力等により＜マンネリ化＞の問題があった。また高齢者と学童保育の＜マッチング＞の問題があった。
＜文化、歴史の伝承＞＜生活の意味の振り返り＞が、＜豊かな時間の共有＞＜子どもの心を育てる＞ことにつながっていた。また、イベントとしてではなく、＜年間計画に位置づけ＞て継続的に実施できるかも課題であった。

⑥環境面、情報面での課題
＜地域との連携＞＜コーディネーターの存在、役割＞について、『地域の民生委員により交流のチャンスを得ようとしたが、消極的な回答だった』『歴史の浅いクラブは、地域との関係も薄い。指導者を地元採用にすることも大切である』などの意見があった。一方、東日本大震災の影響を受けた地域では、＜震災の影響による活動の制限＞が学童保育にあり、仮設施設での実施や、場所の狭さ、通常の活動が困難といった環境があった。

(3)研究２　世代間交流プログラムの開発と介入
　研究１で明らかになったプログラムの効果に関する課題＜双方向プログラム＞＜双方の効果＞＜豊かな時間の共有＞＜生活の意味の振り返り＞＜文化、歴史の伝承＞等を生かしたプログラムとして、構成的エンカウンターを用いたふれあいゲーム、および回想法を取り入れた複合的なプログラムを開発した。

世代間交流プログラムの流れ	
構成的エンカウンター　1	じゃんけんゲーム
構成的エンカウンター　2	おなじところさがしゲーム
回想法	地域に馴染みのある場所の写真などを写しながら回想
影絵	地域にゆかりのあるものを登場人物にした影絵の工作と実演
構成的エンカウンター　3	ほめほめシャワー

①親密感の変化
　親密感は前後で、介入群・対照群および子ども・高齢者ともに有意差はなかった。
②幸福感の変化
　幸福感の得点は、介入群の子どもが介入前49.7±13.5 点、介入後 53.3±12.3 点で、介入後に有意に高く($p<0.05$)、介入プログラムの実施により、子どもの幸福感が上昇した。対照群の子どもおよび高齢者は前後の有意

表２　学童保育における世代間交流の継続的実践に関わる要因

【カテゴリー】	〈概念〉
【学童保育側の実施に関わる要因】	＜子どもの人数の多さ＞ ＜子どもの参加、帰宅時間が様々＞ ＜職員の人数不足、日常業務の多忙＞ ＜時間不足＞ ＜場所が狭い＞ ＜企画、運営能力＞ ＜予算＞
【学童保育側の効果に関わる要因】	＜世代間交流の意義＞ ＜新鮮さ＞ ＜指導員の癒し、励まし＞
【子ども側の実施に関わる要因】	＜失礼な言動＞ ＜発達障害＞ ＜障害への理解＞ ＜高齢者、障害者に対する接し方＞
【子ども側の効果に関わる要因】	＜家庭での困難な状況＞ ＜安心・安全＞ ＜存在を認めてもらう、自信＞ ＜役に立つ喜び＞ ＜忌いやり＞
【高齢者側の実施に関わる要因】	＜身体的問題＞ ＜子どもに対する接し方＞ ＜学童保育への理解、意識不足＞ ＜認知症等の障害＞ ＜高齢者自身の多忙＞
【高齢者側の効果に関わる要因】	＜児童の祖父母との関わり＞ ＜学童保育内外での見守りの役割＞ ＜元気な高齢者＞ ＜異性参加期待＞ ＜元気をもらう＞ ＜得意分野＞
【高齢者と子ども、保護者との関係性】	＜活動の差＞ ＜世代間ギャップ＞ ＜高齢者と保護者の意見の相違、クレーム、トラブル＞
【高齢者と子ども、保護者との肯定的な関係性の要因】	＜顔を覚える親しい関係＞ ＜地域の子育て力のアップ＞ ＜地域に根ざした付き合い＞ ＜ネットワークの充実＞
【プログラムの実施に関わる要因】	＜発達の差によるプログラム構成困難＞ ＜高齢者への安全の配慮＞ ＜マンネリ化＞ ＜年間計画に位置づけ＞ ＜継続性必要＞ ＜マッチング＞ ＜無理のないプログラム＞ ＜児童館等の行事参加＞
【プログラムの効果に関わる要因】	＜様々な世代との交流＞ ＜豊かな時間の共有＞ ＜双方向プログラム＞ ＜子どもの心を育てる＞ ＜共同プログラム＞ ＜文化、歴史の伝承＞ ＜双方の効果＞ ＜生活の意味の振り返り＞ ＜放課後学童クラブと放課後子ども教室の連携　＞
【実施に関わる環境の課題】	＜世代間交流が日常にある環境＞ ＜家族構成の地域差＞ ＜地域との連携＞ ＜共同意識＞ ＜行政の支援＞ ＜コーディネーターの存在、役割＞ ＜震災の影響による活動の制限＞ ＜複合施設＞
【情報の必要性】	＜人材の把握＞ ＜地域学童保育の存在の周知＞ ＜施設の存在、窓口＞ ＜プログラム＞

差はなかった。また、介入群と対照群の有意な群間差はなかった。

③高齢者の generativity 尺度の変化
generativity 尺度得点は、介入群において、介入前 38.4±7.9 点、介入後 44.1±5.3 点で、介入後に有意に高かった($p<0.05$)。また、介入群と対照群で有意な群間差があり($p<0.05$)、介入プログラムの効果が認められた。

(4)まとめ
世代間交流に期待する内容を世代間交流の経験有無別で比較すると、有意な違いが見られたすべての項目において、交流経験あり群のほうが、期待度が高かった。このことから、実際に世代間交流を実践することにより、高齢者の経験や知識を子ども達が学ぶ、高齢者を敬う心や温かい心を養うなどの子どもにとっての効果、高齢者の生きがい、地域貢献や地域とのつながりを実感しやすく、交流活動への期待につながっていると考えられる。継続実施においてはまだまだ課題も多いが、今後、地域性を考慮しながらどのような方法をとれば継続が可能になるのかを検討していく必要がある。
さらに、今回、研究チームで開発したプログラムにおいて、地域の今・昔について高齢者と子どもが語り合う回想法や地域の話を題材にした昔遊び（影絵）の共同作成等から共感、相互交流がうまれ、地域での高齢者の役割意識や生きがいにつながったと考える。
今後は介入プログラムを対象地域・対象者を増やして実施し、さらに洗練していく必要がある。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）
① 森田久美子、青木利江子、小林美奈子、山本晴美、呂暁衛、永嶺仁美、佐々木明子：学童保育における高齢者との世代間交流の継続的実践における課題
－M-GTA による学童保育指導員の意識分析から－、日本世代間交流学会誌、査読有、５（１）、2015、pp11-20.

〔学会発表〕（計４件）
①Xiaowei Lu, Kumiko Morita, Rieko Aoki, Minako Kobayashi, Hitomi Nagamine, Harumi Yamamoto, Akiko Sasaki：Actual situation of intergenerational exchange programs at after-school care facilities for schoolchildren in Japan , EAFONS2016, 2016 年 03 月 15 日, Chiba JAPAN

②森田久美子,青木利江子,山本晴美,永嶺仁美,呂暁衛,小林美奈子,佐々木明子：全国の学童保育における世代間交流の実態第１報：世代間交流の実施状況と施設概要との関連、第６回日本世代間交流学会、2015 年 10 月 03 日、追手門学院 大阪城スクエア

③山本晴美,森田久美子,青木利江子,永嶺仁美,呂暁衛,小林美奈子,佐々木明子：全国の学童保育における世代間交流の実態第２報：世代間交流の実施地域と活動内容の特性、第６回日本世代間交流学会、2015 年 10 月 03 日、追手門学院 大阪城スクエア

④ Kumiko Morita, Rieko Aoki, Minako Kobayashi, Harumi Yamamoto, Xiaowei Lu, Hitomi Nagamine, Akiko Sasaki：Actual situations of intergenerational exchanges with elderly people at after-school care of schoolchildren in Japan, ICCHNR2015, 2015 年 08 月 20 日, Seoul, Korea

６．研究組織
(1)研究代表者
森田　久美子（MORITA KUMIKO）
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・准教授
研究者番号：40334445

(2)研究分担者
小林　美奈子（KOBAYASHI MINAKO）
亀田医療大学・看護学部・講師
研究者番号：40312855

佐々木　明子（SASAKI AKIKO）
東京医科歯科大学・大学院保健衛生学研究科・教授
研究者番号：20167430